

「子育て共同」をめぐって

編集 部

はじめに

本号の特集は、「小学一年生」（先号の特集）のいわば続きです。本県でも小学一年生から「学級崩壊」といわれるような事態があります。先号で高橋武昌さんは「こみをポイと床に棄てる。自分のクラスの子に」どうしてごみをそこにするの」ときいたら、「ぼく、おとしでないもん」と言う。いま、きみが棄てたのだから拾って、と言うと、「どうして、ぼくがひろわなければならぬ」と言う始末。その背景は、家庭環境にあり、その子の「生活のフレーム自体が斜めにゆがんでいる」からと指摘して、そういうフレーム（枠組み）のゆがんだ家庭が確実に多くなっていると問題提起し

ています。

そういう一年生のそれまでの六年間のフレームを見るのが本特集です。

学校医の佐野さん、歯科医の谷田部さんから子どもたちの心身の現代的特徴を、保育園長や保母さんから子育ての共同をどのように取り組んでいるかを報告していただきました。

いまお子さんやお孫さんが就学前の方からは、通っている園と比較するなどして、編集部にご意見を寄せてくださるとありがたいです。

先号には丸山初代さんが「人と交わって人になる親と子のいま」として、無認可共同保育園「あゆみ」の実践を報告していますが、あわせてお読みいただきたい

いと思います。

学校に通わせている保護者の方からは、わが子の保育・幼稚園時代の「土台づくりに大切だった」と思われる経験をお寄せいただければ幸いです。

保育の仕事を巨視的にみる

漢和辞典で「保育」をみると、「イ」は人を「呆」は赤ちゃんがおむつに包まれている姿が起源だと、あります。中国の殷^イに(三三〇〇年前)の時代からある言葉です。



本誌四八号で、三輪定宣千葉大教授は「最近の分子遺伝学で」「七〇〇万年ともいわれる長い人類の歴史の」「九九・九%以上の時間をかけて共同体のなかで『無償教育』によって子育て」が行われた、と述べ、「人間の本質は『無償教育的動物』だ」といっています。

三輪氏はさらに「こうした伝統は家族の中で打算と営利をこえた、心からの愛情によって」子育てをする関係として現代につながっているが、教育の名において子育てを営利の対象にする動きは、教育環境の悪化

そのものと指摘します。

日本国憲法二十六条の義務教育の無償規定は、授業料不要に矮小化され、「国際人権規約」の十三条〇項(b)、(c)を日本は留保して、高等学校、大学の教育費無償の世界の流れに抵抗しています。

保育の話も巨視的な立場から踏み込んだ議論がいろいろです。編集部は、〇歳から五歳までの『年齢別保育講座』(あゆみ出版・一九九三年)を参考にしました。

子どもの成長を保障する土台が歪んでいないか

先述の講座のはじめの部分に「母親の子育ての経験は、過去・現在にわたって蓄積され『子育ての知恵』となつて伝承されている。」が「今日の危機的な社会の矛盾は子どもの世界にもひろがり、さまざまな変化をもたらし子育ての事業は困難さを増している。」「乳幼児の時期から子どもたちが人間的に、個性的に発達してゆく土台となる諸条件が崩されてきている」とあります。

次にあげるこの講座の指摘を、自分たちの周りのなかで具体的に検討してはいかががでしようか。

※子どもをとりまく人間関係の希薄さ、集団の欠如

※連帯感の衰弱

※食生活のおかしさ

※地域や集団の遊びの貧弱化

※「商品化」された退廃的文化のはんらん

一つ一つに思い当たることがあります。これらのこととがら「わが子の健全な発達を妨げているんだ」とかりにわかってもどう対処したらよいか難問です。「学校の成績さえよければ」と思うこともあるのですが、その信仰も揺らいでいるこの頃です。

「子育ての科学」を豊かにする親と保育者の共同

でも、この講座の前がきにはこうも分析しています。働くおおかあさんたちが「ポストの数ほど保育所を」と運動してきたことで、子育ては今や母親の手だけに押し付けられたものでなく、親と保母さん（集団保育に携わる保育者）との分業と協業として発展して「子育ての社会化」が進み、子育てが科学になり、共同の進歩がその科学をさらに発展させ得る、と

具体的には次のようなことだと思えます。保母さんたちは、たくさんの乳幼児をあずかり、保護者の期待や願いを背に、子どもたちを生育過程にあわせて観察

しながら、人間的に育っていくように多様な保育実践をしています。

保護者の願いもききながら、この保育実践が蓄積され、まとめられ、研究者や医師、栄養士、調理師などの専門家と共同で理論化し、保育者を育てる学問に高めます。こうして「子育ての科学」——保育理論が発展していきます。

保護者も園に子どもをあずけることで、わが子を大勢のなかで見られるようになります。さらにどの子ども大切に育て方や、国や県、市町村の子育てに関する行政責任にもとずく保育園への行政措置や財政的支援などの現状にも目が開かれていきます。それはさらに教育環境、自然環境の保全や改善にも視野が広がっていくでしょう。

保護者と保育者が子どもを中心において手を結び合うことが現代の「希薄になった人間関係」を子育て「本来の共同の関係」にかえていくのだと思うのですが……。以下の個別の報告は、「子育ての科学」の地域における営みをうかがい知る貴重な素材と思えます。

佐野医師は、子どもたちの心身に「肥満」や「拒食症」などの変化が生じていることをあげ、大人社会の

生活の歪みの反映と分析します。

谷田部歯科医は、食生活の在り方が歯の健康にどのようなにかかわるかを明らかにします。

西川町鎧郷の広井園長は、新潟市近郊の住宅地として、急激に変わっていく地域で「子どもたちが育ち、保育者が育ち、地域・親が育つ」を合言葉に、子育て共同体を造ろうとする運動を紹介しています。

○歳から、一歳児、三歳児、四歳児、五歳児のそれぞれの発達の問題を色々な地域の保育者から実践的にまとめてもらいました。

*○歳児から一歳児（こまくさ乳児園・菅井美佐）

「お散歩」で人や自然とのふれあいの機会を増やす取り組みです。少子社会の乳幼児は、自然や人々とのふれあいが少なくなりがちです。また地域の「子育てセンター」の役割を担おうとする、保護者との共同も注目されます。

*三歳児（鎧郷保育園・遠藤まゆみ）

自己主張が強い時期の幼児らが、集団の中で変わっていく様子がよくわかります。ちよっとした困難に出合うと落ち込み、回復が遅いこと。親が孤立していることなどの問題提起があります。

*四歳児（斎藤くみ・川村恵子・上地元子・小出美登里）

自己主張が強い三歳児が、言葉を通じて、集団で取り組む行事に参加して成長する姿が印象的です。幼児の質的転換期ともいわれる所以でしょう。

*五歳児（豊栄市・丸田美枝子）

卒園し就学することを念頭におき、教科の学習に対応できるように自立を心がけます。保護者、とくに父親との共同を図る取り組みが光ります。

保護者の生活のありようが、生まれてから六年間の成長に大きな影響を与えていることを保護者とともに認めあつて、共同できるように、こまやかな働き掛けがなされているのを見て、保育者たちの仕事はたいへんなんだなーと思います。

小学校でも、中学・高校でも知識を教えるという課題とともに子どもたちが健やかな心を育ててゆける家庭や地域の在り方を親・地域住民とともに探っていくことの大切さを教えられた気がします。（文責・本田）

